

win²な古着リサイクル

【アブストラクト】

本研究は先進国・アフリカ間に生じている古着問題の解決を目指し、進めてきたものである。現在、アフリカの各地で大量の古着が余っている。この古着とは、先進国が寄付という名目で集め、送った、自国で処理しきれない不要な衣服をさす。実際に私達もリサイクル品として回収してもらうがこれは慈善活動に見えてそうではない。SDGsを掲げる日本にとって矛盾した行為となっており、アフリカに深刻な問題を引き起こす原因となっているのだ。そこで、先進国と途上国がどちらも利益を被るようなwin²なシステムを提案すべく、探究活動を行った。本研究は、株式会社有色CEO 西田真也氏、株式会社NIPPON47代表 末継佳大氏、特定非営利活動法人AYINA 土屋みなみ氏、東北大学大学院医学系研究科 ベリフ・メスフィン氏にご協力いただき進めてきた。様々な視点から考え、学生の私達に実現可能かを吟味しながら、「新しい寄付システム」の作成を行った。「新しい寄付システム」とは、溜まった古着を流通させ、ゴミ山減少・雇用問題の解消をはかるための案である。本論文には、「新しい寄付システム」の提案に至った経緯と、最終形態にたどり着くまでについて論じてある。

キーワード

アフリカ 古着 リサイクル win² SDGs

【本文】

I はじめに

私達は、外国やSDGsに興味があり、今世界で起きている様々な問題について調べた。そんな中で、現在世界では古着問題が深刻であるという記述を見つけた。そこで私達は、アフリカの古着問題解決のために探究活動をしよと決意した。この問題の原因は先進国が「リユース」「リサイクル」と言って、廃棄物をアフリカに送りつけているところにある。私達先進国に住む人は、安く流行りのデザインの服を次から次へと買い、要らなくなったら寄付という名目で、あたかも慈善活動のように”ゴミ”を古着回収ボックスなどにもっていく。この行為は明らかに先進国中心的な考えによるもので古着リサイクルといっているのは、自分たちの立場を正当化しているに過ぎない。このような現状を改善すべく探究活動を行った。

II 研究方法

インターネットの情報は信憑性にかける。加えて、実際現地に行くことは現実的ではないし、身近に当事者がいるわけでは無いため、自分たちの目で真偽を確かめることが困難である。そのため、本研究では、株式会社NIPPON47の末継佳大さん、特定非営利活動法人AYINAの土屋みなみさん、東北大学大学院医学系研究科のベリフ・メスフィンさん、古着屋有色経営者の西田真也さんにお話を伺った。その後、自分たちの仮定を検討・検証し、考察から最も現実的かつ効果がある改善策を作成する。

III 研究過程

①探求内容の絞り込み

私達は『古着』『ゴミ山』といったキーワードをもとに、インターネットを使用し、調べた。漠然としたテーマでしかなかったため、どこの地域にスポットを当てるのか、探求をして結果何をしたいのかを明確にする必要があった。例えば、ゴミ山問題一つとっても、東南アジアやアフリカなど世界各地で見られる問題である。加えて、アフリカでも具体的にどの地域なのか絞らねばならない。しかし、どこかの地域に絞る明確な根拠や理由が探究始まりの頃の私達にはなかったため、当初は広く様々な地域のインターネット記事を見た。また、新しい寄付システムを提案することをゴールとした。この理由としては、まず私達は2つの仮定を立てた。

1つ目は途上国に質の悪い衣服を送らないようにするということだ。先進国の人々から不要になった服が送られているのだから、ある程度は質が悪い。その中でも、穴が空いていたり、明らかに着れないようなボロボロの服を排除し、少しでもゴミになる古着を減らすことが先決だと考えた。加えて、アフリカや東南アジアでは、モコモコの長袖は着るはずも無いし、ストレッチの効かないズボンを履く人はいないだろう。紛争地域で迷彩柄の服をきたら軍隊と間違われてしまう。このように本当に必要でないものは送らないようなシステムを先進国側で作るべきだと考えた。しかし、これは国家間の問題であり、送れない古着は今度は先進国のゴミになり、管轄する団体の利益が見込めないため非現実的だと判断した。

2つ目は先進国で古着を別の方法で使用することだ。リメイクやリサイクルなど、形や用途を変えれば良いのではないかと考えた。しかし、古着の量は膨大であり、国内で捌くには限界がある。また、リメイクされたとしても、流行をおさえた新品で安く買える衣服にはかなわない。また、科学的実験を必要とする活用法に関しては、探究の範囲での実現は困難であったり、実用が何年後になるか不確かである。以上のことより、途上国側の輸入をストップしなければ先進国側の問題は生じないため、現在起こっている途上国側の問題を解決しようと考えた。

途上国の問題を2つあげる。1つ目は、古着の直送ルート集中だ。現状、一部の地域に古着輸出が集中している。これにより、その地域のみ衣服の供給過多になり、本当に着るもので困っている人たちのもとには届かない。そこで各地域に適量の古着を輸送し、適正価格で販売する必要があると考えた。しかし、そもそも発展途上の地域には古着を送る十分なルートなどなく、自分たちの解決したい問題以前に解決すべきものがある。そのため困難であるとした。

2つ目は、ゴミ(古着)処理システムの不十分さだ。途上国ではいらぬものがその場に残ってしまうため古着が次から次へと溜まっていく。それがゴミ山となる。そこで、不要な古着の処理方法を考案し、途上国側のゴミ山減少に協力すべきと考えた。また、先進国側の古着処理にも問題があるため、できるだけ先進国で古着を捌き、途上国に無理に送りつけない仕組みを整えるべきと考えた。しかし、これを探究するとすると、ゴミ処理方法に焦点があたり、方向性が少し変わってしまう。よって、これも困難であるとした。

そこで私達は新しい寄付システムを提案しようと思った。新しい寄付システムとは、先進国が途上国で作られた衣服を適正価格で買い取り、途上国の衣服不足地域に送るといったものだ。まず、途上国の衣服を売る人々から、先進国側が衣服を買うことで、労働者の収入が安定・雇用問題が解決したり、現地の繊維産業が衰退しない。そしてそれらを衣服不足地域に送ることで需要量と供給量が一致し、ゴミにならずに済む。先進国が負担する衣服代、輸送費、人件費等はクラウドファンディングで資金を集めようと考えた。要らなくなった衣服を寄付するのではなくお金を寄付する方向へシフトチェンジしたいとした。

しかし、新しい寄付システムの提案にも様々な問題があった。1つ目は資金が本当に集まるのかという点だ。いくらクラウドファンディングをしても、実際私達のシステムを動かすには何十何百万というお金が必要で、有名団体でもないしかも学生の私達のプロジェクトにどれだけの人が賛同してくれるかを考えたときに、いかに非現実的であるということが考えなくとも分かる。

2つ目はお金をどのようにして送るかということだ。外貨両替などといった金銭の管理が、専門的な知識を持たない私達にできるのか想像がつかない。

3つ目は実際に動く人は誰にお願いするのかということだ。特に途上国において、誰に輸送をお願いするのかなど現地スタッフを考えなければならない。

この問題点を解決するために途上国の問題解決のために活動している団体や、私達と同じ立場の学生起業家に話を伺おうとした。

②外部との連携・資料の憑性の確認

i 株式会社NIPPON47

株式会社NIPPON47代表の末継佳大さん(以下末継さん)に本当にアフリカにゴミ山はあるのかなど、基本的な情報をお聞きした。なぜこのようなことを聞いたかという、私達のテーマに関する文献等が身近になく、ほとんどがインターネットからの情報であり、信憑性に欠けると判断したため、ゴミ山問題解決に関わっている株式会社NIPPON47に事実確認をしたかったからだ。

末継さんによると、ゴミ山は本当にあり、内容としては家庭ごみや古着など様々だそうだ。もともとゴミ置き場であった箇所にどんどん新しいゴミが放置され、それがゴミの山になって溜まっていくそうだ。

ii 特定非営利活動法人AYINA

特定非営利活動法人AYINAとは、「日本とアフリカをつなぐ」をスローガンに、物理的距離に加えて差別や偏見による精神的距離のあるアフリカへの支援を行っていくという団体だ。

私達は特定非営利活動法人AYINAの土屋みなみさん(以下土屋さん)と土屋さんのご友人の東北大学生のアフリカ出身のベリフさんに話を伺った。まず土屋さんから日々の取り組みを通して私達の仮説が妥当かどうか判断していただいたところ、現実性に欠け、学生のクラウドファンディングではまかないきれないというご指摘をいただいた。ベリフさんからは、現地の詳しい現状をきいた。やはり、十分に道路が整備されていないらしく、外地域に行き来するのは困難だそうだ。また、食べるものにも困っているのにましてや衣服にお金をかけることはできないため、そもそも衣服への関心度は低く、いくら案を打ち立てても成功する可能性は低いのではないかと助言いただいた。

iii 古着屋有色

古着屋有色さん(以下有色さん)では主に東南アジアから古着を仕入れ、販売しているそうだ。仕入先はたくさん買ってほしいため、有色さん側は不要な商品も仕入れ、その代わりにいいアイテムを安く仕入れているらしい。不要な商品はリメイクにまわし、販売したり、服飾専門学校に寄付しているそうだ。

③探求内容の再確認・再検討

自分たちの探究内容は現実性に欠けていたため、再検討した。私達は改・新しい寄付システムを考えた。内容は以下の通りだ。

まず、先進国が、途上国の古着市場から二軍服を買う。これは先進国の寄付として行う。そして、買った二軍服を現地の繊維工場に無料で引き渡す。そこで、修繕やリメイクをし、付加価値をつけて販売する。これで利益が生まれる。蓄積した利益を利用すれば二軍古着を仕入れることができるようになるので、将来的には先進国の寄付なしに途上国内で産業が確立されることとなる。この寄付システムが普及すれば、雇用問題などゴミ山以外の問題も改善されることになる。

市場に売られている服で、まだ着られるが破れていたりデザインや機能が悪く売れ残った服

IV 考察

〈班〉

私達の探究題である「win²」は本研究において途上国に古着を送り続けられる先進国のwinと現状の改善経済発展が途上国のwinである。この問題では先進国は古着を途上国に送り続けることを前提に途上国側の状況を改善させる必要がある。

本研究で考察した案は課題解決に繋がるものと思われるが、その根拠や現実性に欠けるため、さらなる調査・検証が必要になってくる。

〈個人〉

この探究活動テーマは、身近だけど身近じゃないようなもので、文献やデータがほとんどなかったり、憶測で書かれたような信憑性に欠けるものが多かったため調査に時間を費やした。多くの時間調べた私達でさえ、得

られる情報が少なかったことから、他の人々はもっと正しい情報に乏しいため、誤った知識による、迷惑な善意を押し付ける今の事態が発生するのも無理はないと思った。よって、まずは正しい情報と、本当に必要な支援策を検討することがこの問題を解決する第一歩と考える。

V おわりに

多くの方と関わっていく中で、様々な方向からの打開策を知ることができ、自身の視野が広まった。そして、私自身、国際的な問題に興味があるため、とてもためになった。古着産業が活発になってきている中で、先進国では自国・自社の利益のみを考えたシステムになっていないかを再確認する必要があると感じたため、まずは今のこの事態の認知度を高め、正しい知識をより多くの人に養ってもらいたいと思う。

本研究に協力して頂いた以下の4名に、深く感謝いたします。

株式会社有色CEO 西田真也氏

株式会社NIPPON47代表 末継佳大氏

特定非営利活動法人AYINA 土屋みなみ氏

東北大学大学院医学系研究科 ベリフ・メスフィン氏

VI 参考文献

・遠藤雄司撮影 朝日新聞デジタル 2022年8月27日

<https://www.asahi.com/articles/photo/AS20220827000170.html?iref=pc>

・探求ポスターより

・朝日新聞 2022年8月27日 p1,p9

・宮城第一高等学校ホームページ”探求活動発表会を行いました。”2024年3月23日

https://miyaichi.myswan.ed.jp/blogs/blog_entries/view/14/0830e163f34ec1496c9aaea08721301b?frame%20id=50

・修学旅行取材時のもの

・NIPPON47ホームページ”Delivery make Delight

<https://nippon47.co.jp/>

・AYINAホームページ”アフリカと日本を国際文化交流で繋ぐ団体です”

<https://avina.org/>

・「世界中の善意がアフリカの産業を殺している」古着リサイクルに秘められた不都合な真実

President Online It# 2022/01/02 10:00 <https://president.jp/articles/-/53225>

VII 資料